様式Ｂ－２

氏名（本籍）	笠井　久美（茨城県）
学位の種類	博士（保健医療科学）
学位記番号	博甲第４６号
学位授与年月日	令和５年３月１４日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審査研究科	保健医療科学研究科
学位論文題目	二分脊椎症者を対象とした性教育の実践と評価

学位審査委員

主査	茨城県立医療大学教授	博士（医学）	山口　忍
	茨城県立医療大学教授	博士（心理学）	佐藤　純
	茨城県立医療大学准教授	博士（人間情報学）	倉本　尚美
	大手前大学教授	博士（看護学）	藤井　ひろみ

論文の内容の要旨

本論文は 3 つの研究で構成され、二分脊椎症の性教育に活用することを目的に対象者のニーズ調査に加え、教材開発及びその実践と評価を実施し効果的な性教育への提言を示している。

【背景】二分脊椎症は神経管閉鎖障害による先天性疾患であり、膀胱直腸障害，歩行障害，水頭症，視覚異常，ラテックスアレルギーなどが生じる。女性の二分脊椎症による性機能の影響については知見が一致せず、男性については性機能障害の可能性が指摘されている。疾病や障害により性生活の満足度への影響，性への消極性との関連，性について心配事があり、海外では性の知識不足や疾患特有の性教育の必要性が示され、教育の方法や効果的な介入の検討が課題になっている。

【目的】本研究は二分脊椎症者の性教育のニーズを把握した上で、性行為に関する教育の実践と評価をし、効果的な性教育を発展させる一助とすることを目的とした。

【方法】第 1 研究では，18～40 歳未満の方を対象に二分脊椎症者の性教育ニーズを明らかにした。半構造化面接では，過去に受けた性教育，役立った性教育，希望する性教育，二分脊椎を踏まえた性教育の必要性を調査し，内容別にカテゴリー化した。質問紙調査では，若者の性白書と国際セクシュアリティ教育ガイダンスを参考に，希望する性教育の内容 22 個を作成して調査した。これを 8 つのキーコンセプト(Key Concept: 以下 KC)に分類し，各属性について検定をした。第 2 研究では，高校生～45 歳の方を対象に動画で性行為に関連した教育を実施し評価をし、事前調査，動画の視聴，性教育前・直後・1 か月後の変化を調査した。調査内容は，性教育内容の知識に関する 12 項目，行動変容に

関する予期 18 項目，一般性セルフ・エフィカシー尺度（General Self-Efficacy Scale: 以下 GSES）16 項目，日本語訳 Rosenberg Self-esteem Scale（RSES-J）10 項目，性に関する考えや行動の変化 1 項目，性教育の評価 5 項目であった。

各評価指標の検定力と信頼性，性教育前・直後・1 か月後の各評価指標の変化，性に関する考えや行動の変化，性教育の評価を分析した。いずれの研究も所属機関の倫理審査委員会の承認を得た。

【結果および考察】第 1 研究の半構造化面接では、男性 9 名，女性 5 名のデータを得た。二分脊椎症者は体や性についての健常者との違い、陰部・臀部の清潔，性行為の工夫や注意点、遺伝、挙児、不妊・不妊治療、病気や障害について他者から理解を得ることに関し、疾病特有の性教育ニーズを示した。また、身近な信頼できる医療者と性の話をすること、同じ病気や障害のある人との情報交換、得た情報を自分に合わせて活用すること、病気や障害に合わせた対処法を見つけることが必要であることが明示された。質問紙調査では 48 名のデータを得た。全体的には「KC1 人間関係」「KC4 暴力と安全確保」、30 歳未満の方は「KC6 人間のからだと発達」、顕在性二分脊椎症者やおむつ・パッドの使用者は「KC2 価値観、人権、文化、セクシュアリティ」「KC3 ジェンダーの理解」、交際経験者は「KC3 ジェンダーの理解」「KC５健康とウェルビーイング（幸福）のためのスキル」「KC8 性と生殖に関する健康」についての教育を望んでいた。医療機関や患者会で当事者のニーズや年齢・発達を踏まえた性教育の実施の検討、当事者が必要な時に情報を得たり、情報交換できる方法の検討、またピア教育が有効であると考えた。第 2 研究では、男性 20 名、女性 13 名のデータを得た。知識合計得点と性の行動変容に関する予期合計得点には、性教育実施前と直後、性教育実施前と 1 か月後に有意差があったが、GSES 標準化得点と RSES-J 合計得点には有意差があるとはいえなかった。今回の教育により知識と性の行動変容に関する予期は肯定的に変化したが、個人の全体的な自己効力感を高める影響はなかった。各評価指標に性別の交互作用はみられず、本動画は男女を問わず利用できると考えた。各指標において男女により教育効果に差があることが示唆されており、性差を考慮した性教育の必要性が考えられる。さらに、42.4%が性教育実施 1 か月後時点で性に前向きな考えを示したが、行動の変化には更なるきっかけが必要と考えられた。性教育の評価は肯定的であったが、さらなる情報提供、方法の工夫、実際的な支援が望まれた。

【今後の課題】研究協力者が少なく、一般化は困難であった。疾患の罹患割合や性教育という研究テーマに依るところも大きいが、より参加や回答しやすい工夫が必要である。第２研究では自作の質問紙も使用したが、より信頼性や妥当性のある尺度の作成を検討する必要がある。また、教材の内容や提供方法による教育効果の違いの検証や知的障害のある二分脊椎症者への性教育の検討も今後の課題である。

【結語】二分脊椎症者は特有の性教育ニーズを示し、診断名や年代，おむつやパッドの使用、交際経験でニーズが異なった。今回の性教育は知識と性の行動変容に関する予期の肯定的変化に有効であり、教育内容は男女を問わず利用できる。性に関する考えが前向きに変化し、性教育の評価は良好であったが、行動の変化にはさらなるきっかけを要し、追加の情報提供、方法の工夫、実際的な支援が望まれた。

審査の結果の要旨

令和５年２月３日、主査・副査２名・外部審査員１名の計４名の審査員において、提出された論文を公開で研究発表を行い、質疑応答と審査を実施した。審査は、本研究科の指針に沿って、創造性・新規性、論理性、信頼性・妥当性、専門領域の関連性、論文の表現力、倫理的配慮の観点から協議した。以下にその内容を示す。

本博士論文は、二分脊椎症の性教育についての検討が不十分である中、身体面、精神面の内容を包含したビデオ教材作成という新たな試みであり、創造性、新規性があり看護実践に寄与すると考えられ将来性が高い価値ある論文であった。

専門領域の関連性とインパクトについては、対象者のニーズ調査に基づいて教材開発を行い、教材を使用した教育の直前、直後、1 か月後の行動変化を評価した介入研究を実施している点にインパクトがあった。性教育というセンシティブな領域においてインタビュー調査により貴重なデータを収集・分析しており専門領域の発展にも期待できる。

論理性については、本論文は２つの研究から組み立てられていた。研究１の結果では性教育のニーズをインタビュー調査により示しており、性に関する日常での悩みや教育への要望など豊富な情報が得られていた。研究２ではそのニーズに基づいたビデオ教材開発を行い、その介入後の変化を３時点で把握しており、科学的評価に基づいた教材開発という点について今後の実践に寄与できると考えられる。教材開発において、目的や手法選定の理由などについて明文化をすることで、さらに教材開発の教育的意義がより鮮明となり発展性が期待できる。また、介入研究の対象者の年代が 18～40 歳未満と幅広く性への課題が異なるため更なる分析をすることで教材の有為性がさらに示されるため継続した研究が望まれる。

信頼性・妥当性については、本学の倫理審査の承諾を得て、介入研究による評価をしており、研究デザイン、研究手法については適切に進められていた。

論文の表現力については、論文の構成や体裁は整っており、査読付きの国際誌、国内誌に各１本の報告（両方とも筆頭著者）がされている。口頭での説明においても明瞭に回答をしており、精力的に研究活動を行ってきた様子が伺われ、研究者としての資質を備えていると判断した。

以上より本論文は、二分脊椎症患者の QOL を高める価値の高い研究と考えられ、今後の発展性も期待できると、審査員全員の合意を得ることができ、博士論文として合格に相当すると判断した。